

保育者養成校で学ぶ学生への道徳指導に関する考察

—道徳観からみた指導のポイント—

浜野 兼一

Hamano Kenichi

キーワード：保育者養成、道徳指導、道徳観

はじめに

本研究は、保育者養成校で学ぶ学生に対する道徳指導の実際的視点について、学生の道徳観の自己認識の分析、検討を通して導き出そうとするものである。

保育者養成校で学ぶ学生には、保育の専門領域に関わる知識や技術に裏打ちされたコミュニケーション能力、創造力、他者と連携する能力などが求められている。これらの諸事項とともに、主体的に学ぶ姿勢や批判的思考力なども不可欠の要素であり、専門職に係る国家資格を認定する文部科学省¹、厚生労働省²もほぼ共通の認識を持っている。一方、前述の様々な「力」の育成は、社会生活上の最も基本かつ重要な素養である「道徳性」や「倫理観」によって補完される。

しかし、近年における保育者養成校の学生の傾向として、各方面からいくつかの問題点が指摘されている。その問題点とは、「人間関係をつくる力の貧弱さ、そこから導かれるコミュニケーションの不得手、希薄化」「他者への配慮や社会的弱者への思いやりを欠いた言動、振る舞いにみられるモラルの低下」「一見温厚で謙虚な立ち居振る舞いをみせるが、実は主体性のない“指示待ち”人間の増加」など、若干大袈裟に言えば、学生にみられる不適切状況は、枚挙にいとまがないほどである。こうした背景により、保育者養成校にあっては、在学生に対する社会人としての基礎的諸能力の育成が大きな課題になりつつある³。

ところで、ここに列挙したもののうち、たとえば「モラルの低下」は、まずもって改善すべきものであり、看過してはならないと考える。なぜなら、倫理観やモラルが自己のなかに内面化されていない者が国家資格を手にするのは不適切と考えるからである。たとえ、保育者養成校での学びと経験の成果を、自身の努力によって得たとしても、不道徳な者やそれに極めて近い者が国家資格を社会で適切に活用できるとは思えない。そして、保育者養成校で指導を行う

立場の人間にあつては、当然の如く、専門職としてのモラルをはぐくむための問題改善に向けた方策を考えなければならない。

そこで、本稿では、今後の保育者養成に向けて、「モラルの低下」状況を改善していく手がかりを得るために、保育者養成校で学ぶ学生の道德観に切り込み、その諸要素を分析することで、道德の指導のあり方や方向性を考察する。

1. 研究の目的

保育者養成校で学ぶ学生への道德指導の方法を検討するために、学生の、道德に関するこれまでの学びや経験を通してみえてくる道德観を手がかりに考察する。

2. 研究の方法

保育者養成校で学ぶ学生の視点や考えを幅広くとらえるために、設定した質問に対する自由記述方式で調査を行った。質問項目は「『道德』という言葉からイメージする事柄とその理由について自由に書いてください」「『道德の時間』の授業で印象に残っていること、覚えていることについて、自由に書いてください」として提示し、学生に回答を求めた。回答の結果については、記述内容の分析により諸観点の把握を試みた。

3. 対象

A県私立保育者養成校1年生13名（女子13名）

4. 調査時期

平成26年7月に、口頭で質問項目を提起し、調査の理由・目的・動機などについて説明を行った。口頭による説明とあわせて、黒板への表記も行い実施した。質問項目への回答が完成するまでの所要時間は15分程度。

5. 倫理的配慮

調査の目的、個人情報の守秘の誓約、調査は無記名で実施し回答は任意であること、また、回答用紙を配布する際に、調査によって得られたデータは今回の研究以外の目的で使用しないことを口頭で説明した。この手続きを踏まえて、合意が得られ協力可能な学生のみ調査の対象とした。

6. 結果と考察

今回の調査で得た「保育者養成校で学ぶ学生に対する道德観」についての自由記述の内容と記述内容を分析した結果及び考察を以下に示す。

質問①「道德」という言葉からイメージする事柄とその理由、について

【個別の状況】

イメージ	理由
人や心	小学校の時の授業でよくやっていたのが、この二つだったから また、心は大切だと思ったから
心	心のことを勉強するから
人のことなどについて学んでいく	小学校のときなど、道徳の時間を思い出して
人間関係	小学校でやっていたのが、このような感じだった気がする
こころ	小学校のときの授業で「心のノート」を使って、 人を傷つけないようにする授業をしていたから
部落差別 心のノート	道徳の時間に部落差別についてたくさん勉強したから 道徳の時間に使っていたノートの名前
心のノート 人との関わり	小学校のときにやったから 心のノートを書いたから 印象深いから
ガンコちゃん	小学校の低学年で授業中に見ていた
人間らしさについて	小学校のときに、そういった授業だったと思うから
人間性	人の心を育てるということが思い浮かんだため
心を豊かにする	小学校の頃、正解のないそれぞれの考えを述べる授業を受けたから
心	道徳とは、人の心なしでは成り立たないから 優しさの心、気づきの心、尊敬の心、 すべて、心があってこそ
小学校の授業（道徳の時間）	小学校の時間割に道徳の時間があり教科書を読んだりした覚えがあるため

上記から、調査対象学生が抱く「道徳」の「イメージ」の記述内容を分析すると、まず、「心、こころ」に関連する記述が「7」で最多となっている。また、「人・人間」に関連する記述も多く「6」、「心のノート」が「2」となり、これら3項目がイメージの主要部分を占める結果となった。その他挙げられたイメージとしては、「部落差別」「ガンコちゃん」「小学校の授業」「道徳の時間」がそれぞれ「1」である。

これらの分類をみてみると、「理由」の記述のほとんどが学校の道徳の授業（主として小学校）から導かれたものとなっている。具体的には、「理由」に関する13の記述のうち、道徳の授業と直接関連づけられていないものは2例と、極めて少ない。この質問（項目①）における、質問者の意図は、文字通り「道徳」であって、「授業」という表記、限定はしていない。にもかかわらず、授業関連の理由づけが多いという状況は、調査対象の学生の「道徳」に対する認識状況を

知る手がかりになる。

質問②「道徳の時間」の授業で印象に残っていること、覚えていること、について

質問②については、主として「授業の印象や記憶」という側面から記述内容の分類を行い、以下のような結果が導き出された。

	キーワード	記述例
「学びの環境」	道徳の時間	「道徳の時間を」「道徳の時間に」「道徳の時間が」
	授業	「授業中に」「考えを述べる授業を」
	低学年	「低学年で」
	学校段階	「小学校の時の」「小学校のときなど」「小学校で」「小学校のときの」「小学校のときに (2)」「小学校の低学年で」「小学校の頃」「小学校の時間割に」
「視点」	気持ち	「心は大切だと思った」 「このような感じだった気がする」 「人の心を育てるということ」 「そういった授業だったと思う」 「人の心なしでは成り立たない」
	実践	「心のノートを読んだりした覚えがある」 「心のノートを書いた」 「部落差別についてたくさん勉強した」

まず、「学びの環境」については、道徳の時間、授業、低学年、学校段階というキーワードに関連づけられる記述がみられた。なかでも特徴的といえるのは、“学校段階”であり、小学校での道徳の学びに関するものがほとんどであった。

一方、「視点」については、気持ち、実践に位置づけられるキーワードが浮かび上がった。ここでは、体験活動を通した道徳教育の推進につながる、道徳教育の「実践」的部分に直結する記述があまりみられなかった。

7. 道徳指導の着眼点（「おわりに」に代えて）

以上、本稿では、保育者養成校で学ぶ学生に対する道徳指導の実際的視点を導き出すために、『道徳』という言葉からイメージする事柄とその理由』『道徳の時間』の授業で印象に残っていること、覚えていること』の二つの質問に対する自由記述という方法によって、学生の道徳

観の自己認識の分析、検討を行った。

自由記述の分析結果から見い出された考察をまとめると、まず、質問①の『「道徳」という言葉からイメージする事柄とその理由について』は、イメージを形成する要因や背景には、主に小学校における道徳の授業の経験が横たわっている、という特徴が明らかとなった。また、質問②「道徳の時間」の授業で印象に残っていること、覚えていること、についてでは、「道徳の時間」の実践的指導の部分が十分とは言えない点が導き出された。

これらの結果を踏まえて、保育者としての道徳指導のポイントについて検討する。限られた質問項目からの調査であったが、その結果を分析すると、学生への今後の道徳指導の手かかりが浮かび上がった。ここでは、特に「質問①」において、「道徳のイメージを小学校の道徳の授業」を手かかりに表出させている例が多い、という点に着目したい。

まず、「道徳」のイメージの根拠について、授業関連の記述が多くみられるからといって、道徳の授業が充実していたという根拠にはならないであろう。この点について、見方を変えれば、調査対象となった学生にとって、「道徳」をイメージする手かかりが、授業しかない、とも受け取れる。あるいは、「道徳」という言葉に触れる機会が学校以外にほとんどなかった、とも考えられる。この点を綿密に検証できれば、より適切な道徳指導ができるのではないだろうか。

一方で、家庭教育に目を向けると、たとえば、家庭において、適切な子育て、躾等を行っている場合は、特に「道徳」という言葉を使わなくても大きな問題にはならない、と考えられる。しかし、家庭教育が適切でなく、その家庭を取り巻く環境も不道徳、無道徳であった場合は子の道徳性育成に負の影を落とすことになる。こうした環境で育った子どもが、道徳の授業を適切に行っていない学校に通った場合、本人の内面に「徳」がはぐくまれる機会が大幅に制限される可能性が高い。

以上の点を考慮すると、学生の道徳指導にあたっては、まず、道徳に関する義務教育段階での既習状況を診断的に確認することからはじめなければならないと考える。また、可能な範囲で、学生自身の家庭における教育環境、躾の状況も情報として必要になるであろう。これらを土台として、指導者側からみれば、複数の側面、観点から道徳的心情を実感できる授業設計を行い、教育的関わりの成果が学生の道徳的実践力を刺激し、最終的には「学生の道徳性の涵養に収斂されるような学び」の環境を整えることが求められる。

注

¹ 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』 平成20年7月 38～39頁。

文部科学省は、「教師の役割を果たすために必要なことは、幼稚園教育の専門性を磨くことである。その専門性とは、幼稚園教育の内容を理解し、これらの役割を教師自らが責任をもって日々主体的に果たすことである。つまり、幼児一人一人の行動と内面を理解し、心の動き

に沿って保育を展開することによって心身の発達を促すよう援助することにある。そのためには専門家としての自覚と資質の向上に教師が努めることが求められる」という見解を示している。

- ² 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課 『保育所保育指針解説書』 平成20年4月 13頁。
『保育所保育指針解説書』には、「『専門的な知識・技術』をもって子どもの保育と保護者への支援を適切に行うことは極めて重要ですが、そこに知識や技術、そして、倫理観に裏付けられた「判断」が強く求められます。日々の保育における子どもや保護者との関わりの中で、常に自己を省察し、状況に応じた判断をしていくことは、対人援助職である保育士の専門性として欠かせないものでしょう」と記されている。
- ³ 2006年以降、経済産業省は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」が「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力から構成されているととらえ、これらを「社会人基礎力」という言葉で表現している。ここでいう、「基礎力」は、専門領域における知識習得の前提、基盤となる基礎学力や現場で必要となる専門知識、技術などの育成にもつながるものと理解される。